

一般財団法人生涯学習開発財団主催 多元化共生社会におけるコミュニケーション力
第7回 「循環する時間」と「成長する時間」～社会と自分と子どもの関係～

2015年3月8日 東大福武ホールラーニングシアター

講演：宮台真司（社会学者／評論家／首都大学東京教授）

ナビゲーター：苅宿俊文（青山学院大学社会情報学部教授）

第7回を迎える多元化共生社会におけるコミュニケーションカシリーズの講演会。今回は社会学者の宮台真司氏が登壇。

■悪にも理由がある。カオスに耐えられる育て方。

まずは、ここ20年ほどで増えたやたらと細かい段取りをして自己満足に浸る「段取り野郎」を一蹴。パワポを作ってやったつむりの「パワポ野郎」も同じ。もちろん宮台氏はパワポを使用せずに話を始めた。

コミュニケーションの本質について理解していない劣化した人たちが増えて、コミュニケーション能力の重要性が叫ばれている今、体験を通じた学びであるワークショップが求められている。

宮台氏には8歳、5歳、1歳の3人のお子さんがいる。どういう教育実践をしているのか。実は、氏は小学校ではウンコおじさんとして知られている。散歩の方向が一緒の子供たちがついてくる先々にウンコの絵を描いて歩くので、そう呼ばれている。なので授業参観では担任の先生が恐縮するほど子どもたちに絡まれる。

自宅のテレビでは、勸善懲悪がない1960年代のコンテンツを子どもたちに見せている。怪獣や悪も人間が作り出したもので、犯罪や悪にも理由がある内容が多く、自分も子ども時代に何故に悪になるのかを楽しみにしていた。宮崎駿作品も3歳の頃から見せていた。宮崎作品は必ず勸善懲悪を超える。すべて本当はいいやつだという思想。昨今は善と悪の二元論でしか考えられない「白黒野郎」ばかり。グレイゾーンやカオスに耐えられない人間が出てきている。

人間にも、怪獣にも、いいやつも悪い奴もいる。勸善懲悪ではない。善悪だけではない。そういうフレームが最初にインストールされていると宮台氏がしたい教育の基礎になるというのが理由だ。

宮台宅は子供たちが出入り自由にしているそうで、自分が子供であったころと同じ状況を作りたいと宮台氏は語る。

子育てに関してもカオス的な環境を作り出そうと努力している。例えば昔のように気軽に晩ごはんをいっしょに食べていくことができる環境だ。

子どもたち日々話すのは、今はいろんな人がいろいろなことを言っている。「うそをつくな」、「いじめな」、「LINEでひとを殺すな」とか。でも世の中見てみる。ちょっとくらい嘘ついて、ちょっとくらいモノをとってもいい。ちょっとくらいけんかしてもいい。でもやりすぎではダメ。「やりすぎてなに？」と子どもたち聞かれるが、それは「いい質問。それを学ぶのが大人になるってことだよ。答えなんてないんだよ」と氏は子どもたちに伝えている。

「僕がよく子どもに言っているのは、細かすぎるのは人をダメにする。『段取り野郎』は最低。女の子とデートする時に計画的にいかなくてパニックに落ちいっているやつと同じ。」子どもの頃転校を繰り返していたので、頭のいい奴、ヤクザのような奴、どちらにも受け入れられないと生きていけなかった。ある時期、研究で風俗のフィールドワーク回っていて、今も再開しているが、昔は風俗の後ろにはやくざがいて、そこと話をつけないければいけなかった。僕はそう育っているから平気だ。転校先で学級委員になれたり、かばってくれたり転校生面倒みてくれたのはやくざの子だった。母は彼らを晩ご飯に呼んで、高いおもちゃで遊ばせる。そうすると勝手に恩義を感じてくれた。母の戦略だったのかもしれない。最終的には自分でやれることがあるから、自分で何もかもやろうとしなくても、できるやつと組めばいい。そういう知恵を自動的に成長する時に学べたのが僕たちの昭和30年代。今の日本にはない。

例えば、ヨーロッパは道路にガードレールがついていない。景観のこともあるが、リスクやカオスを異常に取り除くと、依存的な身体になってしまう、生きる力を失ってしまうから計算してリスクを残すしている。リスクやカオスを残すことをしてきた外国に対して、日本はそれをしてこなかった。その中で育っている若い人たちはリテラシーが乏しい。

昨今の日本の統計データの有名なのは、日本の中学生96%が幸せでないと答えている。ポイントは2つある。今の若者は幸せだという学者もいるが、それは望みを下げれば人は不幸せ感を覚えなないというだけ。恋愛にもそれが表れている。「社会はそんなもんでしょ」というのは期待水準が低いということ。しかし、社会はどうあれ「私はこんなもんじゃない！」というのが願望水準。これが風化している。願望水準が低い。これがひとつのポイントである。所詮そういうもんでしょと決めてしまえば精神の平穏が保たれるのだ。

あともう一つは、社会が劣化している変化が起こっているので、適合してコミュニケーションしようとしてもダメ。90年代からうつが3倍に増えている。日本人は適合しようとしてしまうが、いかに適合しないかということが大事である。

■感情の劣化とゲイテッドコミュニティ化

「感情の劣化」について宮台氏は、ネトウヨが先進国でも問題になっていることを挙げる、事前のフレームでこれに抵触したらこれ、ということをつくり定規に同じ反応を繰り返し替えていて、本当にこの人が言いたいことがなんなのか分からないという問題が、インターネットで可視化した。この先は悪循環に陥る可能性がある。

今までは劣化した人間がたくさんいたが公の場で主張されることがなかったが、今はインターネットが劣化文化を構成している。同じ穴のムジナが、同じサーキットの中で永久にサーキュレーションする構造が、インターネット化によってどんどん進んでいる。

インターネットでこういうものに触れている子どもたちにとって、社会イメージが違ったものになるのは確実だ。民主主義にはもう可能性がないかもしれないということができた。

教育とは、自分の子どもを幸せにすることだと思っているダメな人がいるが、教育とは社会をいかにまともに再生産するのかというのが教育の課題である。民主主義の基本は人々の理性的な信頼で成り立っているが、人々が分断され、孤立化すると、不安と鬱屈によって簡単に感情のフックによって吊り上げられる。そうして全体主義を増幅するようなタイプの人間が増えるということが統計的にも裏づけられている。

1945年の戦後から20年ほど働けば豊かになるという時代が例外的に生じ、その結果分厚い中間層ができ、その中にメディアが取り込まれていった。

分厚い中間層の対人ネットワークが、メディアによる直撃を緩和してくれる。

だからメディアのコンテンツが暴力的か性的かを議論するよりも、メディアの受容環境が孤独かどうかの問題となる。親しい人間と観れるか、親しい人間と問題をシェアできるかどうか、そこがポイントだ。ジョセフクラッカーも言っている。

ポールラザーセンは、オピニオンリーダーで、二段の流れという説を出した。

昔はマスコミの直撃が危惧されていたが、今は自分が所属するスモールグループ、小集団オピニオンリーダー層によって一旦咀嚼された情報をシェアしている。だからメディアによる直撃をそんなに心配することはないという学説である。それが二段の流れの説。

咀嚼された情報がボトム集団に共有されてるのだ。

しかし90年代に入り、グローバル化され、IT化によってホワイトカラーの仕事が次々コンピューターにとって代わられるようアウトソーシングされると、一気に中間層が分解していく。

かつては企業を含めた有力な経済人は、グローバル化で外に出て行き、社会をケアするという動機を失った。社会はどうあれ、経済は回るという状況が続いている。人々は分断され孤立していて、感情的に劣化しているので、排外主義のネタをまけば乗ってくる人がいる。日本だけではない。社会はどうあれ、だから政治も回る。今は感情の政治である。

かつての市民社会が復活しない先進国。ということは一回分解した中間層が元に戻ることもない。資本主義から言えば、投資をしなければ資本は回らない。投資をする動機を得られるためには、労働によって得られる利潤率よりも、投資によって得られる利益率の方が高くなければいけない。そうしなければ資本主義は回らないのである。

宮台氏は続けた。

再配分はありえない。マクロには民主主義はうまく回らないのである。民主主義がうまく回るには、出されているビジョンにどうやってそこに到達するのかの経路問題。だからワークショップが出てくる。

ワークショップではファシリテーションが必要。話し合いが暴走しないのか熟議が問われるとき。熟議をするとリベラルサイドに向かう。熟議をしてワークショップをするとき、同じ穴のムジナで話し合ってもまったく意味がない。

良いファシリテーターはラウドマイノリティズ（声が大きい人が）議論を引き回さないように。絶えず牽引する。ファシリテーターは抑制的に介入する。しかしトピックを引き回すことはしない。

怨念が残らないように、うまくやるのだが、もうマクロでは社会はどうしようもならない。民主主義もどうしようもならない。だから顔の見える共同体自治において自分たちだけは懸命に生き延びるのだ。

気を付けなければいけないことは、感情の劣化現象が、集合的な決定を歪めるということ。をいかに排除するかということ。そのために感情の劣化をしていないような人たちのネットワークを有効に利用して、行動に対する自己力に結び付けていこうとする。政治家の世界では常識である。

ただしあまり言われていないが、危惧されることがある。それは見えないゲイテッドコミュニティ化。シェアハウスがその一例だ。今もやっているがインターネットでは見えないようにした。

宮台氏も私塾をやっているが **open to all** ではない。インターネットでは絶対に見えないようにした。なぜかというと、感情が劣化した連中が大量にやってくるから。紹介者が責任を持ってない限り、新しい人間は入れないということになっている。しかもそれはインターネット上では見えない。これが見えないゲイテッドコミュニティ化だ。

社会はともあれ、まず自分たちをどうするか。社会は巨大システムがある。

だから巨大システムはどうあれ、自分たちは続くという「自分たち＝我々」を作り出さなくてはダメなのだ。

■コミュニティに入る能力

宮台氏の話は、ここで最初の子育ての話とつながっていく。ゲイテッドコミュニティを作り出す時、我々は条件を備えていなければいけないという。

単なる閉じて見えなくなればいけないというものではだめ。これでは怨念が出て社会は続かない。一部の人間だけが幸せで他の人間は置いてきぼりではいけないのだ。

感情のキャパシティや能力を十分身につけさせよう。そのためには、子どもたちに小さいときのカオスの経験が大事なんだと宮台氏は言う。50年代コンテンツ。円谷プロとゲゲゲの鬼太郎と宮崎駿を見せることと、ルドルフシュタイナーの教育である。

子供たちは、放っておくと、大人の評論を気にしてうまい絵を描こうとする。シュタイナーメソッドではうまい絵を描けないようさせるために、紙を全部濡らしてしまう。そうすると感情にフィットした色を見つけられる。そうすると感情のデプス、キャパシティを見つけられる。シュタイナーは臨海年齢をピアジェに先立って言っている。愚かな例は、読み書きそろばんを幼児期の非常に早くから習得させている例だ。読み書きそろばんは臨海年齢が高いので後から取り返せる。取り返せないのは、音や光ビジョン、体のキャパシティだ。もっと言えば感情の幅、共感能力。臨海年齢が低いのであとから取り戻せない。認知的発達理論がこの論を学問的にフォローアップしている。

さて、情操教育をして、感情能力を鍛えれば、見えないゲイテッドコミュニティに入れるかもしれないが問題はその後。それを外に広げていく熱意と力があるか？これは見えないゲイテッドコミュニティを実際に続けられるかという問題とほぼ表裏一体である。

システムは損得勘定なので、素早く計算できる人間がシステムを円滑にまわして収益をあげることができることが重要とされる。

しかし、共同体は違う。損得勘定を超える力、内発性があるかどうかのカギ。それが共同体を支える力、絆の存在可能性を決めるのだ。いざと言うときに絆がないと助からないと考えるのは損得勘定だが、そうではなく、いざという時に自分がどうなっても助けたいと思う人間がいるかどうか。それが自分が共同しているということ。だから日本にはもうほとんど共同性はない。なにがあっても自分の犠牲を払っても助けたいと思う人間がいるかどうか。

ギリシャ時代が発祥のエリート教育も、自発性よりも内発性、損得勘定をいかに育て上げるかであった。これがギリシャの教育の共通問題。なぜか？それについてアリストテレスが言っている。「もし損得感情の強い人間がポリスを形成していて、ポリス間戦争がおきれば、必ず負ける。ポリスを存続させるためには、戦争に勝つためには損得勘定を超えて、ポリスに貢献する人が必要。」

損得勘定を超える内発的なものが奨励されるのだ。社会科学の歴史もそう。この世界が存

続するためにはアリストテレスが言ったような、条件が必要だと考えられる。それは内発性である。それはどうすれば再生産を寛容できるような社会を続けられるかである。

■立派な大人になれ。

さて、子どもの問題を進めましょうと宮台氏。

紀元前5世紀ギリシャから20世紀まで社会科学にいたるまで基本的には同じモチーフ。それは損得勘定を超える利他性の公共性が内側から沸き上がってくるような人間を、社会が、どのような社会の条件を備えていれば再生産できるのか。このことなんです。

自分の子どもを幸せにしたいのはいいのだが、大事なのは人の幸せが自分の幸せであるとかんじれるかどうか。そういうやつになれよと言っている。つまりそれが実は「我々」である。一族ではない友愛関係で結ばれた関係であっても、走れメロスのような人間、同感能力が必要なのだ。

アダムスミスの「神の見えざる手」も、そのことを言っている。

愚かな人たちは市場主義が自動的に問題を解決すると勘違いしている人がいるが、そんなことは言っていないのだ。市場において「神の見えざる手」が働くのは、市場に参加する人達が同感能力を持っている場合に限る。

教育の目標をどこに設定しているのか。

自分の子供を幸せにしたいのは分かるが、社会がボロボロで幸せになるわけない。人が幸せになって自分も幸せになれるような、そういう人間になれと宮台氏は伝えている。人が悲しんでいれば悲しくなり、人が苦しんでいれば苦しくなる。そういう人間に子ども達を育てたい。そういうものを目標にした様々な課題設定能力と遂行能力を確保するために、課題の設定と遂行能力のために知識やフィジカルが必要なのだ。

立派という概念を再生してほしい。とにかくあさましいやつになるなと言いたいと宮台氏。昔は立派な人はたくさんいたのだ。立派と勝ち組は全然ちがう。他者によって触発された他者に感染された動機が一番強い。本当に必要なのは感染動機だ。ぼくも本当にすごい人を真似ようとした時期がある。

宮台氏は中学、高校へ大学の営業もする。そこで話をすると、乳幼児～高校生までは響く。損得勘定を超える何かに貢献しようとして、ちょっとした刺激を与えると目がキラキラする人がたくさんいる。しかし大学は全然だめだ。

なにが起きているのだろう。就職が厳しくなって、損得勘定しか考えられないのだろうか。教養はドイツの概念だが、自己形成、修養のこと。ゲーテのビルヘルムマイスターの修業時代など、何がいいか悪いかは時間が経たないと分からないものである。何かに一気一有する考えはやめるのだ。

教養教育はみんなに必要なことだ。ギリシャや、昭和のある時期まで知識人言っていたこと。「立派になれ。」

宮台氏は、小さい頃やくざのおやじにも言われた。「立派になれ、あさましいやつになるなよ。」

そこで必要なのは見本。昔の大学と今の大学が違うのは就職状況の厳しさだけじゃない。例えば、そこには名物教員がいた。授業に30分送れてくるが、誰一人文句を言った人はいない。アル中の先生もいた。しかし誰一人文句を言ったことはない。

昔は立派なやつがいろんな階層にいた。一般の中に立派だなあと思う人がたくさんいた。

キーワードを確認しましょうと宮台氏。自発性よりも内発性。損得勘定よりも内から沸き上がる力。理解よりも感染。マクロをなんとかしようよりも、あるいは顔の見える共同性。見えない化を克服する絶え間ない努力。これは同感能力によってはじめて成り立ちます。俺たちより、あの人たちはどうなの？と思うこと。同感能力が必要。劣化という言葉がたくさん使いましたが、昔のひとから比べれば相当劣化しているのだ。それを相互コミュニケーションを通じてどうやって立て直すかが課題。

今ここから出発すればいいと宮台氏は続ける。みなさんの知恵と工夫で自分達が享受していたどんなことがなくなったらまずいのか。シミュレーションしてください。

そのヒントは僕の教育実践を通じて話しました。工夫できることはたくさんある。工夫すると後ろ指をさされることもたくさんある。「また宮台のおやじが何かやってるよ。」と言われるが全然問題ない。

TBS のラジオ番組を始めた時、クレームが1回でもあったらやめると伝えていた。だから今まで一度もクレームが伝わってきたことはありません。しかし5周年の飲み会でプロデューサーが、「クレームの話していいですか？」と、2年間はひどかった。毎回毎回ひどいクレーム。でも伝えるのを我慢した。3年目からはびたっとなくなった。「宮台だったらしょうがねえ」になった。

慣れです。この戦略は東大の助手になったときから使っている。86年に、助手になったその日に「助手のオフィシャルアワーは9時から5時までですと書いてある大きな紙を貼った。あつという間に学会以外でも「とんでもない助手が出たと全国に有名になった。」当時助手は鞆持ちだったので、なんでもやらなければいけない時代。それも、「ああ、宮台が

やってることでしょ。」となった。最初は波風たちますけど、2回目から楽チンです。いつまでも同調してると同調破るハードルが高くなる。まっすぐに同調破ると得するのがこども達。うちの子供はラッキーでしょ、ああまた宮台の子供だからでしょとなんでもできるよ。こどもには伝えてありますが。そういうふう知恵と工夫を重ねて感情の幅と内発性を取り戻してもらえればいいなと思います。

■ 質疑応答

Q. 顔の見える共同体。最終的にはフェイストゥフェイスなのかな。自分自身の場合に落とすと、最後はそこじゃないかと思います。確かなものは自分が核を持っていないとダメなのかなと。そういうメッセージなのかなと思うのですが。どう作っていけばいいでしょう。

A. インターネットは顔を隠すことができる。

一時、ネトウヨがゼミに来ていた。やつらはスーパしょぼい。僕の舎弟みたいなのがネットの不正請求で捕まったやつがいる。

テレビやラジオのプロデューサー達はネットのクレーマーにビビっている。所詮しょぼいそんなやつらだよ。

アメリカなどは匿名でクレームをいうなんて、自分がクソだと言っているようなもの。ネットを住処にしている人はまずい。

「ウワサの真相」に僕のことが書かれているが僕は全然傷ついてません。

「エールだと思った。」編集長と会った時にそう言ったら、「宮台さん分かってますね。エールですよ。これは。そうなんです」

一言一句になんで反応する？懐の深さが問題。イデオロギーに関係なく、立派なやつならいい。

イデオロギーなんて俺のゼミに3ヶ月いれば直る。この人は一体どういう人なんだろうと想像する力を養うことが大切だ。

Q. 介護現場で働いている。感情劣化だと思うが、スタッフ同士でけんかがある。向き合っていくのにチームを作る具体的なやりかたを聴きたい。

A. キーワードは居場所。そこから先は微妙な話。カルトや極左はどうやって学生を勧誘するか知ってますか？最初は正体を隠した鍋パーティーをやって、ざっくばらんな世間話

をします。ここがあったかい家族みたいな場所と思った段階で少しずつ正体を明るみにしていく。一回包摂して、ゆだねの状態だと洗脳しやすい。

言い方によって微妙ですが、まずは居場所を提供して、ゆだねの状態を作ってから、従来の思っていることと違う情報を与える。みんな自己防衛を持っているから、壁を直進できないのです。説得もナンパも同じ。ディフェンスのバリアを外してから情報を発信していくということです。

Q. 社会のシステムがどうであれ、自分たちの共同体を作ったときに劣化した人を除くことが世の中でひろがっている。劣化した人は排除されていく。排除された人は、排除しっぱなしでいいのか。長期的にはそういう人が出ないように教育をしなくてはいけないのでは？人の幸せが自分のしあわせに。そういう人の幸せも、考えていくことに矛盾を感じている。

A. まず、解けない問題だと自覚すること。宗教もそうだが、包摂しても境界線があって、くりかえすとどんどん濃密になっていく。20パーセント、90パーセント増やしても残る。同調していくと。濃密な非排除性は常軌を逸した活動にしやすい。モンスターペアレンツが起こる。僕は世田谷区に協力しているがクレイジークレマーは超高齢者の独居老人で男性が多い。重大な問題です。この層をどうするか。行政を円滑にしていくにも大事。1日中電話で舗装しろうるさいと舗装しちゃう。保育園がうるさいから防護壁を作れとかいうことに現に作ってしまう。行政が負けている。ヨーロッパでおじいさんが言っても「こういう人が言っているから行政は聴かなくて言い。」となっている。クレイジー・クレイマーが行政を動かさないように。直接聞かないようにしなくてはダメ。

では、どうするか「おじいちゃん気持ちは分かるよ。飯でも食おう」とやるしかない。そうしないともっと濃密になっちゃう。刃傷沙汰になる。自殺につながる。包摂していくと排除する層がもっと濃密になる。知恵を使って暴発しないように。」

Q. 熟議のワークショップ、小さなコミュニティの顔の見えるコミュニティが大切という話で、感情の劣化した人が入ってこない小さなコミュニティを作ることだったが、自分だと同じ理屈理論、小さなコミュニティを作りそう。マイクロコミュニティーをつくる時に何が重要なのか。どういうことを熟議すればいいか。

A. 一言でいえば「WE：我々」の作り直し。住民投票運動をしていた時、繰り返しワークショップを提唱していた。原発がイエスかノーの住民投票の時も、前のワークショップが本体。そのワークショップでは高校生は全員投票権がある。海外は中学生も投票権がある。熟議やワークショップに参加できる。在日も同じ。みんなが集まって顔が見えるところ

ろでワークショップをすると何が起きるか。立派な人もいればそうでない人もいるところで、ステレオタイプ論：根拠の無い、枠組みの中に入って判断する愚昧な振る舞いから逃れることができる。新しい協同体、協働性、絶えずリセットされる枠組みを内包しなければならぬ

ワークショップの意義は不完全情報状態を乗り越え、物事を評価する自分の知らなかった価値を知ること。

ベアードキャリコットのスキームでまちづくりのやり方。代官山の例で言うと、街の巨木切り倒せという要求があった。短い時間の人間人生の要求を通せば駄目になる。生き物にとって大事かを考えなければならない。その木は街の真ん中にあり、シンボリックな意味を持っていた。邪魔になるから切るという意見の人に、ある団体が説得に当たった。代官山という生き物のなかで、あなたの尊厳と場所との結びつきを説明した。この説得は有効で安心安全便利が大切だと思っていた住民が要求した。このようにワークショップで新しい情報に気づいたり、価値の物差しに気づくことが重要だ。新しい我々に気づける事も重要。我々は大きな虚構、多くが思い違いでできているので、現実的な工夫が必要。